

でも友達でも一匹もやらぬことにして居るから遺憾ながら君にも遣れない」

「併し僕は是非欲しい。僕は其れを貰つても自分で所持する考ではない」

「何にするのだ」

「君は先般熊狩に往つて熊を打つのは露西亞を打つ積りだと云ひ又今日は丈けの

獲物があつたのはロゼストウエンスキーの艦隊を日本の艦隊が打潰す前兆だ

と言ふから、僕は之を貰つて歸朝した時我が天皇陛下に献上したいと思ふ。僕

は自分の私有物にする氣は毛頭無い」

「成程、天皇陛下に献上するか、それなら一番大きいのを上げよう」

と言つて大に喜びました。其の日官邸を辭し去るに臨み、

「君が日本に歸る迄に能く皮を鞣して、眼の球も入れて、生きて居る其の儘に見

えるやうにするから、君が歸朝する時之を持ち歸つて、天皇陛下に献上し、此

の熊皮に付ての事柄を奏上して呉れ給へ」

と言ひました。それで講和談判も濟んで私が歸朝する時大統領に暇乞に往きます

と、其の献上の熊の皮を托されました。それから歸朝し、拜謁仰付けられました

とき、陛下に其の事を直奏致しまして、是がルーズベルトがコロラド州で打ち取

つた熊の皮の一番大きい物で、ロゼストウエンスキー艦隊の全滅の吉兆だと大統領

領が申して居りました品でございますと奏上致しました所が、陛下は大變な御喜

びで、其の熊の皮を明治四十五年七月三十日の崩御まで、御學問所の次の間に敷

かせられて、ルーズベルトの記念として長く御愛用になりました。さうして其の

御返禮として平和克復後、初めて全權大使として華盛頓に往く青木周藏子に托し

て御品物を賜つた。其の品物は當時の宮内大臣田中光顯伯に御沙汰があつて、田

中光顯さんから私に相談がありましたから、私は、

「ルーズベルトは武士道を尊信して居るが故に、日本の緋絨の鎧を御贈りになつたら、定めし喜ぶであらませう」と申して二人で相談をして、緋絨の大鎧を捜し出して上奏し青木大使に托して、熊の皮の御返禮として御贈進になりました。ルーズベルトは明治天皇の賜物として非常に喜びました。永く家寶として大切に保存して居ると云ふことを私は聞きませんでした。

もう三時間近くにもなりますから是で今日は終りと致しまして、若し皆さん方で此の次を御聴きになりたいと云ふ思召ならば、其節にロゼンストウエンスキーの艦隊の全滅から、講和談判までの事を御話しようと思ひます。是で今日は終ります。長く御聴き下されたことを感謝致します。(拍手起る)

第三回

日露戦役當時に於ける 我邦内外の事情 下

諸君、連日炎暑の際に斯く多數の御方が御集りになりましたのは、私に取つては非常な光榮に存じます。併し此炎暑の際諸君に對し衷心洵に相濟まない感が致しますので、今日は成べく此話を終りたいと存じます。實は色々申し上げたいことはありますけれども、一年八箇月の間の事を僅三回の演説で述べるので、全部詳細に話す事は困難ですから最も重要な項目と思ふ事だけを記憶から喚起して話をしようと思ひます。所要時間は前回位と思ひますが、或は少しは長くなるかも知りませぬ。此の炎暑の際に洵に恐縮でありますけれども、復と得難き時機ですから、私も此の事を是非諸君に御話申上げたいと思ひます。

偕奉天の戦争が如何なる衝動を亞米利加人に與へたかと云ふと、我が軍は鴨綠江を渡つて以來、連戦連勝、唯々沙河の戦で少し負けただ位、我が軍と云ふものは強い。あの奉天の戦は當時の日露兩軍の兵數から砲門の數、其他戦争の日數を較

べて見ますと、世界が始まつて以來の大戦争と云つてもよい。——勿論歐洲戦争は其の後のこととてございませうが——三十八年三月十日の奉天戦までは、世界各国の戦争歴史を見ても、あの位の激戦はない。又一方があゝの位の大勝利を得た戦さはない。それでまあ非常に亞米利加人の感動を惹起した。是は何が故に日本が斯の如き立派な兵隊を持つて居るか。又斯の如く忠勇なる兵隊は如何なる訓練によつて出来たかと云ふ事に就て、亞米利加の陸海軍の軍人は勿論、學者政治家教育家實業家其の他の人も研究を始めた。て其等の人が寄り／＼私を各俱樂部・協會等に呼んで、日本の軍人の教育はどう云ふ方法を以てやつて居るか。どう云ふ譯で斯の如き勝利を得たか。實は吾々は今迄日本は斯の如く勇武な國とは思つて居なかつた。何れの時から斯う云ふことが出来て居るか、少し話を聞かせて貰ひたいと言ふのである。そこで一通り私は日本開國以來の歴史に就て知つて居る所を

申しました。すると其の列席の人々が、是は吾々少數の者だけが聴くには惜しい事實であるから、是非亞米利加國民全體に何とかして聞かせたい。どうか公開演説にして貰ひたい。と云ひました。私は此際亞米利加人から滿腔の同情を寄せ貰ひたい、又此の日露戦役の歴史を米國人に知らせたいと思ふ念が胸に一杯でありましたので、何所にも出かけて行つて、喜んで演説しませうと答へた。そこで紐育に政治論理學協會と云ふものがありますが、其の會長のアドラス氏の案内で四月二日に紐育のカーネギー・ホールで公開演説を致しました。紐育に往かれたお方は御存知でありませうが、カーネギー・ホールは亞米利加第一等の廣い公會堂である。其處には凡そ六千人位這入るすばらしい大きい會場があります。然るに此講堂は建築の不完全なるが爲に反響がして、随分演説の仕悪い會場である。併しそれが一番廣いからと云ふので、四月二日に其處でやるから、私に演説

をして呉れと言つて來た。其の演題は彼等の要求に依つて『日本人の性質及理想』と云ふのを選びました。もう戦さが勝つことは分つて居る事實であるから、日本人の性質及び理想につき聞き度いといふ要求であつた爲めに此の演題に致しました。約束通り往つて見ますと、六千人ばかりの聴衆が來て居る。其の會場が洵に音響の反射が悪いから、私の英語が向ふの隅まで通るや否や不安に思はれたので伴れて居つた二人の秘書を一番端の壁に立たせて、私の演説が聞えるかどうかを試した。若し聞えなかつたならば、もう少し高くとか、もう少し強くとか名刺に書きボイイに持たせて寄越すやうに、豫め準備をして置いて、それから演説しました。幸に隅々まで聲が通つて、二時間以上の演説が一言一句も漏らさず亞米利加人の耳に入つたと云ふことでありました。此の『日本人の性質及理想』と云ふ演説の内容は、一々詳しく申上げませんが、唯其の骨子だけを申上げます。

「抑々日本の文明の原則は正義である。正義を遵奉すると云ふのが原則である。之に反して歐米の文明の精神は、勢力を得ると云ふことである。殆ど霄壤の差である……」

是が私が冒頭に述べた意見である。

「故に生存競争の舞臺に於て若し東西の兩國が衝突する時には、今日迄の實例に徴するに正義は常に勢力に壓迫せられ、道徳上の識見は常に物質的の腕力に壓倒されると云ふ結果を齎したのである。現に支那が阿片戦争に於て英吉利から負けたが、これは阿片を英吉利の商人が賣込む爲めて、つまり支那人の體質を軟弱にさせ、病氣にさせるやうな、人道に背く商賣をしたから起つた戦争である。それに支那が反對したが爲に阿片戦争が起つて、支那は香港を取られ結局正義が腕力に壓迫されたのであります。近く我國に於ても同様二十七八年の戦

争で、我軍が支那に勝つて遼東を占領した。所が露獨佛の三國が干涉して、日本が遼東を支那から割譲させることは東洋の平和に害があるから支那に戻せと言ふのである。表向きは遼東還付の忠告であるけれども詰り壓迫である。當時日本の陸海軍は戦後の疲弊から回復しない爲、已むを得ず涙を飲んで之を還付した。斯う云ふ例があるではないか。日本の文明の原則は常に正義を本として居るから無謀の腕力には敵はぬ。日本は最初からどう云ふ考を懷いて居るかと言ふと、日本は數千年前既に支那から儒教を取入れ、印度から佛教が傳來したのを同化させ、茲に文明の基礎を築き上げた。故に精神的訓練を經、正義の守るべく人道の貴ぶべきことは十分知つて居るが、奈何せん交通の關係上歐米人の有する學術・技藝・機械的の方面等には今まで力を盡さなかつたから此方面に一籌を輸し、思はぬ不幸を見るに至つた。日本は古來から正義公道を道義の

根本として居るが、之に加ふるに歐羅巴の物質的の文明、即ち腕力、機械の發明、學術の應用を以てし、之に依つて彼に對抗するの外はないと決心したのである。仍て明治の初年から殖産工業を盛にし、陸海軍を擴張し、一面には憲法を制定して人民に自由の權利を與へ、信教を自由にし、議會を開いて、國民をして政務に參畫せしめた。爲めに歐羅巴今日の文明的政治を立ちどころに施し得た。併ながら歐羅巴の文明を輸入して機械的學術的に國を發達せしめたが同時に、祖先傳來の正義公道と云ふ國を爲す根源は少しも忘れずして今日まで來た。故に日本の國民教育の方針は、曰く自負すること勿れ、曰く弱者を虐ぐること勿れ、曰く常に自ら慎みて放埒な舉動をすること勿れ。他人に對しては丁寧懇切にして決して粗暴な振舞をする勿れ、等である。明治二十三年に明治天皇から教育勅語と云ふを賜はつた。教育勅語は我が國肇國の精神を基礎とし之

に近年輸入したる歐米學術の長所を加味し新に國民の向ふべき所を示されたのであります。」

そこで教育勅語の英譯を讀上げた。殊に其の中に於て私が最も力を入れて讀上げ且つ説明したのは、御承知の左の一句である。

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ

「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」即ち今度の戦争は國を賭してなしたる戦であるから義勇公に奉ずるのである。此の明治天皇の教育の勅語の御精神を此大戦で實際に行つたのである。是が即日本教育の方針である。日本國民の精神の

中に此の明治天皇の教育勅語の御精神が流れて居る。」

それから後にも各所で教育勅語の説明を致しました。それに就て申上げたい事もありませうけれども、それは餘り長くなりませうから省きます。尙日本精神を作るのに此の教育勅語の外に、もう一つ感化を與へたものがあると云ふ話を致しました。

「それは此の教育勅語は國民一般の教育の原則である。併し陸海軍に對しては此れ以上感化を與へるものがある。——此の教育勅語で教育された日本國民が陸海軍に従事すれば『軍人讀法』と稱する天皇陛下から賜はつた勅諭がある。是は明治十五年に明治天皇が陸海軍の軍人に特に御示しになつたものである。それにはどう云ふことが書いてあるかと言へば、斯う云ふことがある。」
と言つて軍人讀法を私が讀上げた。是は皆さん御承知でございませうが、明治十

五年に御發布になつた軍人讀法であります。

第一條 誠心ヲ本トシ忠節ヲ盡シ不信不忠ノ所爲アルベカラザル事

第二條 長上ニ敬禮ヲ盡シ等輩ニ信義ヲ致シ粗暴倨傲ノ所爲アルベカラザル事

第三條 長上ノ命令ハ其事ノ如何ヲ問ハズ直チニ之ニ服従シ抗抵干犯ノ所爲アルベカラザル事

ルベカラザル事

第四條 膽勇ヲ尙トビ軍務ニ勉勵シ恐怯柔懦ノ所爲アルベカラザル事

第五條 血氣ノ小勇ニ誇リ争鬪ヲ好ミ他人ヲ侮慢シ世人ノ厭忌ヲ來ス等ノ所爲アルベカラザル事

アルベカラザル事

第六條 道德ヲ修メ質素ヲ主トシ浮華文弱ニ流ルル等ノ所爲アルベカラザル事

第七條 名譽ヲ尙トビ廉恥ヲ重ンシ賤劣貪汚ノ所爲アルベカラザル事

「以上のお言葉を陸海軍の軍人に賜はつた。是は兵營の中の見易い所に大きな字

で書いて掲げてある。一度兵役に服すれば朝夕己の眼に映ずる。而して練兵す

る時には隊長が讀上げて兵卒之に和して諳誦する。教育勅語の下に二十歳まで

教育された者が、陸海軍に入れば又三箇年間——日露戦役當時は三年兵役であ

つた——此の讀法によりて教育される。是が抑日本軍が今日旅順・奉天の戦に

勝つた所以である。」

斯う私が説明致しました。是は二つとも英譯した。所が此の軍人讀法なり教育

勅語なり各方面から其英譯を貰ひに來た。現に亞米利加のウエスト・ポイントの

陸軍士官學校の教官が態々私の旅宿に訪ねて來て、先般貴方の御讀上げになつ

た軍人讀法は吾々の陸軍士官學校に於て教材にするからどうかそれを呉れると言

つて來た。それから又東部都督のグラント中將、是は大統領グラント將軍の長男

で紐育に居つた人である。是がまた私の所に來て先日御演説の軍人讀法は英譯に

なつて居るさうであるがどうか貰いたい、私が監督して居る東部都督の統轄内の兵卒に之を配布し之を讀ませて、日本の陸軍のやうに強くなるやう兵隊を訓練したいから、どうぞあれを呉れると云ひました。又アナポリスの海軍大學校の教官が来て、是れ亦亞米利加の海軍大學校の教材にするから呉れと云つて一部携へて歸りました。亞米利加の陸海軍人や教育家たちは日本兵の強くなつた譯は此の教育勅語及軍人讀法のお蔭である事が分つて皆大に喜びました。

其の次には日本人の理想は如何と云ふことに説及ぼした。

「日本人は豫てから歐米の文明を輸入して、我國を進歩せしむると云ふ方針で舉國一致して努力して居る。それは明治の初年五箇條の御誓文の一に、

『廣く智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ』
と云ふ箇條がある。智識を世界に求めて、日本の皇基を振起させると云ふのが

日本國民の理想である。それ故に此の日露戦争の影響が如何に日本人の頭に響いたかと言へば、如何程正義を主張するも腕力が乏しくては決して之を貫徹することが出来ぬと云ふことである。又國家は軍備が充實してなければ、如何に外交的折衝が巧でも何の効能もないと云ふことを今度の戦で痛感した。翻つて今度の日露の戦が歐米人に如何なる影響を及ぼしたかと言へば、是迄歐米人は自ら稱して文明の民である。亞細亞・亞弗利加の未開國の人民を救ふのが吾々歐米人の天職である。仍て耶蘇教を傳播して憐れな未開化又は野蠻の人民を救ふてやる。是が吾々の天職である。それで吾々の往く所、未開の國は取つても宜い。未開の人民を虐げても彼等を文明に導く爲には少しも構はないと云ふので土地を分割して取る。それが天職と彼等は心得て居る。所が是迄彼等が未開國と侮つた亞細亞の一隅に在る日本が、何ぞ知らん耶蘇教國の露西亞を一撃

の下に叩付けたのを見て日本と云ふ國は恐るべき國だ。今迄吾々が亞細亞を救ふのは我が天職と思つて居つたのが既に間違ひである。又亞細亞の人民は歐米人に向つては唯命維れ従ふものと思つて居つたが、測らざりき日本と云ふ強國が出て來た。是れ即ち今度の戦に依つて日本の國民の眞價を歐米人が發見したのである。

又此戦争が亞細亞に於ける我が同種族の人民に如何なる影響を及ぼしたかと言へば、是迄は歐米人から言はれれば御無理御尤で、如何に正義を主張しても何等の効能もなく唯、白哲人種の悪虐無道の行爲にも服従して居つたが、今度日本と云ふ國が蹶起して、あの悪虐無道の露西亞を叩付けた。吾々も亦日本と同じ人種であるから、潜勢力は十分あると云ふことを亞細亞人をして自覺せしめた。そこで彼等東洋人種は日本の先轍に倣つて、歐米文明を扶植し機械を輸入

して發憤すれば、將來は獨立を回復することが出來ると云ふ希望を懷くやうになつた。

是が今度の戦の影響である。第一日本國民に與へた影響、第二歐米人種に與へた影響、第三亞細亞人種に與へた影響である。併し日本國民は之に誇つて歐米人は吾々には敵對は出來ないと云ふやうな傲慢な考は決して起さぬ。然らば日本人の將來に於ける希望は何かと言へば、將來に於ては東洋の特性と西洋の學術とを融和せしめ打つて一丸と成して一つの新文明を造り、世界の人民をして其の恩澤に浴せしめ、全世界の平和を維持して世界皆兄弟と云ふ東洋西洋の聖教の本旨を實現させると云ふ大希望を日本人は懷いて居る。」

と斯う演説した。是は歐米人から言はせれば随分思ひ切つた己惚れ演説かも知れぬが、私は思ひ切つて六千の亞米利加人に向つて斯う演説した。所がそれが翌日

の新聞に出て、大變衰める者もあれば又攻撃する者もあると云ふ譯でありましたが、是が日本人の性質及理想と云ふことに就いて、私が亞米利加國民に向つて公會堂に於て公開演説をした初めての演説であります。

さうすると、それから面白い結果が出来て来ました。其の演説が新聞に出るや否や、露國大使のカシニーは新聞紙上に於て私の説を反駁をして、非常な毒舌惡筆を揮つて縦横無盡に惡口を言つて、私に戰を挑んで來た。さうして紐育ヘラルドが露國大使の此の攻撃論文を載せた。併ながら私は是まで露國大使カシニーの議論に對しては度々駁撃したから、もう不問に付して何も取合はなかつた。これは四月の二日です。さうすると同月の二十三日に匿名の手紙が來て、斯う云ふことが書いてある。

「拜啓貴下は米國に遊ぶこと前後數回、而して此の國に在留せらるゝこと幾星霜

に及べり。故に米國人が虚偽の言論を以て世人を瞞着するの特性あるを看破せられ、而して自ら其の壘に倣ひ、昨年以來各所に於て日露戰爭に關し虚偽の言論を以て米國人を欺瞞せられ、を見る。然るに米國人中亦貴下の術策に陥らず術策を看破するの具眼者あることを記憶せよ。貴下自ら警戒せられよ。然らずんば變或は其身に到らん。」

一 米 國 人

金子男爵貴下

と斯う云ふ手紙が來た。是は脅迫状である。即ち私が演説したり又活動するのを見て、演説を止めなければ——露西亞攻撃を止めなければ、變が及んで爆彈が飛ぶかも分らぬと云ふ脅迫状である。私は是も一笑に付して、少しも顧みなかつた。それで此の演説は随分亞米利加には影響があつた。

それから五月の初めに大統領が午餐を共にしたいから来て呉れと言つて來ました。是は戦事の事とは關係がございませぬけれども、教育家の御集まりだから此の事は一寸申上げたい。此の午餐には大統領の一家族と、私と、それから二三の友達、竝に曾て日本に來たビゲローと云ふ人が居りました。食後大統領が、「實に日本の陸海軍の軍人の勇武には驚入つた。日本國民と云ふものは實に偉い人種である。」

と頻に褒めて、

「併し日本人はまだ缺點がある。是は君だから憚らず申上げるが、日本は女子の教育が後れて居る。日本の女子をもつと向上させなければならぬ。」

とかう話しました。そこで私は、

「さうか、併し僕は君の言ふ説に一概に反對もせぬ。それは日本の女子の教育に

も又位地にも多少缺點がある。是は古來からの習慣だから従つて缺點にもなるが、それは漸次改良して行く。併し僕は日本の女子をして貴國の婦人の如き教育を施したくない。是は吾々は絶対に反對である。」

大統領夫人の前で私はさう言つた。さうして

「それはどう云ふ譯かと云ふと、君の國の中流以上の女子の有様を見ると、學校の教育は殆ど男女同じやうなものである。學校を卒業した相當の年配の者は、それ相當の名望家の婦人ならば、唯々綺羅錦繡を身に纏うて夜會に列なり、近所の人達からちやほや持囃されて交際場裏の花と謳はれ、又或は輕車に乗り肥馬に鞭ち、公園を廻つて意氣揚々と己の美貌を世人に見せびらかし、而も自分の家の子供の教育は保母に任せて、自分が産んだ子供の教育さへもしない。而して其の女學校とか、女子大學とかに往けば、男のする仕事と同じ仕事をして

居る。結局女をして貞淑よりは寧ろ男性化させると云ふのが今の亞米利加の女子教育である。君は知つて居るであらう、英吉利の詩人のゼームス・トムソンと云ふ人がどう云ふことを言つて居るか、*“Men were wild till woman smiled.”* 『男は野蠻でありし、女が一たび世に出て微笑むまでは。』女なるものが現はれて微笑を湛へて男に接したから、男の粗野な野蠻な性質が軟いだ。男と云ふものは元來性質粗暴である。それを軟化させて立派なる文明の民にするのは女の天職だと言つて居る。』

さうするとルーズベルトが、

「然らば日本の女子の教育はどうして居るのか。」

と聞き返しました。そこで私は、

「今は稍々歐羅巴や亞米利加の女子教育に似て來たが、それでも我が國の封建時

代や吾々の育つ頃の女子教育の方針は今尚ほ維持して居る。勿論學術技藝等は歐米から輸入して居るが、併し女子教育の精神は古來のまゝ儼として存してゐる。婦人は家庭團欒の中心となると云ふことを始終考へて居る。故に家庭に於ては子供と苦樂を共にして、子供が泣けば自ら涙を流し、子供が喜べば自ら喜んで、子女と其の苦樂を共にして、家庭の燈明となり、光彩となると云ふことが女の理想である。又夫に對しては内助の勤に従事し、常に經濟を整へるに當る。爲に夫は外に出ても少しも内顧の憂を感じず、家事の煩累を去らしめて、専心一意夫をして國家の爲め又は業務の爲に勤むのが、是が日本女子の理想である。仍て女子は良妻賢母、名譽を長く保つと云ふことを常に念頭に置く。日本

と申しますとルーズベルトも、

「それは僕も同感だ。僕も今日のアメリカの女子の教育。君の言ふ日本の封建時代の女の教育に賛成だ。」

斯う言ふ談話をして其日は大統領の官邸を辭し去りました。

其後華盛頓に Mother's Congress 「母の大會」と云ふのが開かれまし

年一回アメリカ中の母たる人が皆寄つて、母たる義務、母たる理想を研究議である。其の會で大統領を招待して演説をして貰ひました。大統領が其の「母の大會」に出席して演説しました。其の演説の内容が、翌日のアメリカ中の新聞に載つた。それを私は紐育に居つて読んで見ると、其中にどうも私の説が諸所に散見する。是は私の説を採用したなと思つて居つた。すると大統領から五月十八日に食事に招びたいと言つて來た。往つて見ると、其の食事の席には夫人も居

られた。やがて大統領の方から、

「君は僕が此間『母の大會』で演説した記事を讀んだか。」
と尋ねますから、

「讀んだ。紐育の新聞で讀んだ。」

「どう思ふか。」

「あれは僕の演説のやうに思ふがどうだ。」

「其の通りだ。」

と言つて夫人を顧みて曰く、

「僕があゝの演説を頼まれて其の草稿を自分で書いた時に妻の意見も聞き妻と同居にて書いた時、先般君から聞いた日本の女子の話が僕の頭に這入つて居つたものと見え僕の手を通してペン先から君の意見が流れ出て、到頭終まであの通り

になつた。」

と云ふ。更に夫人に向ひ、

「お前も知つて居るだらう、彼の演説の草稿を書いた時の事は。」

と言つて三人とも大笑ひした。そこで私はルーズベルトに向ひ、

「あの演説の草稿を持つて居るか。」

「此の通りパンフレットとして出版されてある。」

「僕にも一部呉れ。」

「どうするのか。」

「之を僕は 皇后陛下に献上する。」

「それでは喜んで進ぜよう。」

それを私は貰つて直に香川皇后宮太夫を経て當時の皇后陛下、昭憲皇太后様に

捧呈致しました。ルーズベルトは當時日本の女子の教育に就いて、斯の如き意見

を持つて居つたと云ふことを、一寸茲に餘事ながら申上げて置きます。

それから食事が済んで、例の通り二階の書齋に上つて色々外交上の話をした

時に、ルーズベルトが斯う云ふことを言つた。

「私は嘗て君に言ふた通り、露西亞は奉天の戦であの通りの大敗北をしたから、

無論講話を請ふだらうと思つて居つたが、未だに請はぬ。請はぬのみならず露

西亞からの報告を見ればロゼストウエンスキーが亞細亞の海岸に來り段々日本

に近寄ると、碇泊港で受取つた所の報告に依り、彼が歐羅巴を出て來る時とは

餘程意見が違つて、艦隊の數と云ひ、兵力と云ひ、日本の艦隊は恐るゝに足ら

ぬから必らず對馬海峡か何處かで日本の東郷艦隊を全滅してしまひませう。又

クロバトキンは奉天では負けたけれども、まだ哈爾濱に五六十萬の兵隊を持つ

て居るから、北方から坂落しに來て今度は大山軍を悉く亞細亞から追拂つてしまひませう。其の時に至て始めて講和談判をする。今は講和談判をする時機ではないとさう云つて居るから仕方がない。何れはロゼストウエンスキーの波羅的艦隊の運命に依つて決まる。是が日露兩國の決勝戦である。日本が之に負ければ兎に角、勝てば講和談判になる。是が一番必要な時機である。實はロゼストウエンスキーの艦隊が日本海に近付くことに付ては僕も非常に憂慮して居る。若し日本が負けたならば、講和談判は如何になるか、僕は憂慮に堪へぬ。此の海戦が即ち最後の決勝戦である。そこで君に忠告したい事がある。是はどうか日本政府に君から言つて貰ひたい。僕は今度ロゼストウエンスキーの艦隊と日本の艦隊との闘て何方が勝つか分らないと思ふ。全體ロゼストウエンスキーの勢は偉いものである。君の方にも勝算はあらうけれども、若し日本が必勝を

期するならば、僕は茲に日本政府に忠告したいことがある。夫れは僕が日本の軍事に就いて彼此言ふのは差控ふべきであるけれども、是まで日本の爲に働いて來たから、是だけは日本の政府に僕の意見を通じて貰ひたい。決して僕が日本の戦略に喙を容れるといふ譯ではない。」

と斷つて言つた。ルーズベルトは嘗て海軍次官として経験があるから海軍の事は十分承知して居る。そこで言ふのに、

「僕の考ではロゼストウエンスキーは對馬海峽を一直線に乗切つて浦鹽斯德に這入るであらう。之に反して東郷艦隊は露國の艦隊が一直線に進んで來るのを、對馬海峽か何處か丁字形の陣形を以て應戦するかも知れぬ。さうすると向ふは一直線に來て日本艦隊の真ん中を突いて、其主力艦を潰し、日本艦隊を中斷して兩方に打割つて、其間を突き抜けて、浦鹽斯德に逃込んだならば大變であ

る。それであるから此の丁字形の戦術を止めて、日本の艦隊を二つに分けて、一隊は朝鮮海岸に寄せ、一隊は北九州に並べ、さうして對馬又は壹岐の海岸に潜航艇・水雷艇を澤山置いて、ロゼストウエンスキーの艦隊が来たならば、左右から水雷艇で撃ち、さうして本當の戦ひは海峡の真ん中に来た頃を見計つて兩方から挾撃ちにしてはどうか。丁字形では向ふの主力で衝かれるから不利である。故に僕は斯う云ふ戦術を考へた。是は單り僕の考だけではない、亞米利加の海軍の戦術家も同意見である。之れを君どうか日本政府に通知して呉れ給へ。」

と熱誠を以て言つた。それで私は直に暗號電報を以て日本政府に通知した。

所が是は後で聞きました、日本の東郷大將はルーズベルトの意見とは反對に別に見る所があつて、矢張丁字形で之を邀へ撃つて、あの通りに全勝を得た。之

に就いて歸朝後島村速雄・加藤友三郎、何れも當時東郷大將の參謀長又は參謀になつて居つた人達の話を聞き、又海軍側の友人に聞くと、日本でも丁字形で撃つか、或はルーズベルトの言ふやうに二つに別れて挾撃ちにするかと云ふことに付ては随分議論があつて、東郷艦隊の幕僚中にも意見が別れて居つて、最後迄決まらずに居つたが、いざロゼストウエンスキーの艦隊が来たから出て往くと云ふ時に、東郷大將の命令で左に往けと云ふので左に往つたと云ふことを聞きました。是は東郷大將の偉い所であの丁字形をルーズベルトは危んで居つたのに、其戦術を用ひて敵を全滅したと云ふことは、全く東郷大將の策略の宜しかつたのと、又我が將校・水兵の武勇なる結果であると私は思ふのであります。

そこで茲に一つの話をしたことがある。待てども暮せどもロゼストウエンスキーは來ない。所が五月の二十七日は土曜日である。私は何時まで待つてもロゼ

ストウエンスキーの消息がないから、土曜・日曜の二日は秘書一人を伴ひ、一人は紐育に残して、アトランチック・シチーの海岸に往つて休養しようと思つて、彼の地に往き其の晩は友達の家で晚餐に招かれて夜の十一時頃ホテルに歸つた。さうすると、まだ旅客が起きて居つてホールに皆集つて居つた。私の顔を見るや否や事務員が飛んで来て赤の電報——外國電報は赤い紙である——其の電報を見せた。それを見ると私が紐育に残して置いた秘書から打つた電信である。今日波羅的艦隊と日本艦隊と衝突した。さうして其の電報の趣意は斯うであります。「長崎駐在の亞米利加總領事の電報に依ればロゼストウエンスキーの艦隊と東郷艦隊と對馬海峡で衝突した。敵の軍艦六隻を撃沈し九隻を捕獲し東郷艦隊無事」と云ふ電報である。其時旅客は皆な私の周圍に集つて之を見せると云ふから、それを私が讀上げるや否や其處に居つた男女はわあわあ言つて萬歳を唱へ、さうし

て私を食堂に伴れて往つて思ひ／＼にシャンペンを抜いて、萬歳々々、日本の大勝利と絶叫した。夜の十一時過旅客の男女は知ると識らざるとを問はず皆な萬歳を唱へシャンペンを抜いて喜んだ。所が喜んだのは喜んだが餘りに電報が善過ぎる。六隻を撃沈し九隻を捕獲して東郷艦隊無事とある。あの大戦争に多少は事實より誇大に言ふたかも知れぬけれども、東郷艦隊無事とは餘り善過ぎる。明日にでも本當の電報が来て、ひよつと間違つて居たら大變であると思ふた。此電報は亞米利加の總領事が長崎から打つたので、それが一番先きに亞米利加に來た。其の晩は私は興奮して餘り嬉しくて寝られない。到頭夜か明けて東天が白々になつたから一番汽車で歸らうと思つて、アトランチックシチーのステーションに來て見ると、驛待の電報が紐育から來て居つた。それを見ると沈んだ露西亞の軍艦、捕獲した露西亞の軍艦の名前まで書いてある。是で本當だと云ふことが分つた。

さうして列車に乗つて居る旅客は知ると識らざるを問はず私の坐席に蟬集して皆私の手を握つて、大勝利で目出度い〜と言ふ。僅か三十分ばかり汽車が往くと、もう號外を汽車の中に賣りに来る。さうして私に買つて呉れと言ふ。それから紐育の停車場に着くと、此の私の五尺三寸の小さい體が七尺以上になつたやうに自分も思ひました。通行人が私の顔を見るとわい〜言つて萬歳を唱へた。それから向ふ河岸にボートで渡つて馬車に乗つた。左右の亞米利加人の家には日の丸の旗が立つて居る。又通行人が私の顔を見れば帽子を取つて萬歳々々と言ふ。實に此の時の有様は偉いものであつた。そこで歸りまして直に天皇陛下に祝辭を申上げた。それは田中宮内大臣を経て電報を打ちました。

米國人は日本海の大勝利を以て世界未曾有となし狂喜雀躍、願くは微臣の祝詞を兩陛下に上奏あらんことを請ふ。

それから暫くすると今度はルーズベルトから手紙が來た。其の手紙を一寸讀上げますが、斯う云ふ文句であります。

謹啓陳者今回の大勝利は貴兄にも定めて御満足の事と察し申候彼のツラフワルガ一の戦勝若くは西班牙の「無敵艦隊」Invincible Armada の撃破も這般の大勝には遠く及ばずと愚考仕候

今後三週間に御出府の機會有之候はゞ一度拜晤仕度候今朝竹下海軍中佐の訪問に接し候際偶々海軍大臣來り合せ同中佐の辭し去らるゝを見て中佐こそは多幸を羨まるべき人に候日本人全體殊に日本海軍の將士は今や欣喜の情胸に滿ち殆んど手の舞ひ足の踏む所を知らざるの感あるべしと被語申候敬具

千九百五年五月三十日

萬歳!!!

華盛頓大統領官邸

セオールドー・ルーズベルト

男爵金子堅太郎殿

手紙の中に「萬歳」と書いて圈點を三つも打つてあります、餘程嬉しかったものと見える。

そこで三週間の中に都合が付いたら来て呉れと言ひますから私は往つた。往くや否や手を握つて、實に未曾有の大海戦にあの通りの勝利を得やうとは僕は思はなかつた。其の電報が来た時にはルーズベルトは電報を持つて自分の官房に居つて來客に會つたが、午前から午後まで來る人毎に東郷艦隊の勝利の模様を一々説明して、殆んど自分は日本の海軍の大將のやうな氣持で居たが、顧みれば自分は亞米利加の大統領である。それに日本の海軍の戦さの事ばかり朝から晩まで話して居つて、何も公務が手に着かなかつたと云つた。餘程嬉しかったと見える。是

が此の波羅的艦隊の全滅の時の有様である。

そこでルーズベルトが申しますには、もう是で愈々講和談判になる。陸軍はあの通り、海軍でも此の通り、露國が頼みに思つた波羅的艦隊が全滅したから、是は講和談判になる。是から僕が一肌脱いで兩國の間に盡力しよう。斯う言つて是から講和談判に着手致しました。そこで愈々是から講和談判の事を申上げます。一寸此處で面白い話がありますから申上げますが、東郷艦隊の大勝利が明になつた後の或日のこと、私が紐育の晚餐會に招かれて、十一時半頃大分満腹であつたから、運動旁々歩かうと思つて、常用の馬車を返へしてフィフツ・アベニューを歩いて居た。所が辻待の馬車の馭者が自分の馬車に是非乗つて呉れと言ふ。「俺は今夜腹が張つて居るから運動の爲に歩くのだ。」
「さう仰しやらずに是非乗つて下さい、何處までいも良い、貴方のお望みの所ま

「で往きます。」

「それでも俺は運動の爲に歩きたいのだから。」

斯う言つたが馭者はなかく承知しない。

「實は東郷艦隊の大勝利があつて、吾々馭者仲間では、日本人を載せた馭者でないと幅が利かぬから、何處までとも宜い、只で載せるから是非乗つて下さい。」と言つてどうしても私を遮つて承知しない。そこで私は考へた。馭者が斯くまで日本に同情を寄せて居るのに、それに乗らないのも折角の同情を無にする譯であると思つて、私は宿屋まで乗つた。さうして宿屋に着いた時、大抵此の位と思つて懐中から金を出して渡すと、それは無代で乗つて貰つたのだから戴きませぬと言ふ。

「まあ、さう言ふな。是は馬車代ではない。お前歸つたら仲間の者とシヤンペン

を抜いて、日本の爲に萬歳を唱へて呉れよ。」

「それならば頂戴する。」

と言ひました。斯う云ふ有様が當時の亞米利加人の日本人に對する同情である。

是から講和談判になります。六月七日にルーズベルトが會ひたいからと云ふので會ひに往くと、例の通り會へば晝食を一緒に食ふ、それから二階に往つて色々話をした。さうすると大統領が、もう今度は露西亞も大分弱つて居る、そこで露西亞大使のカシニーに、もう斯うなつた以上は速に平和の爲に、人道の爲に、又露西亞の爲にも、茲で講和談判をする方が宜いと思ふ。此儘戦へば哈爾濱は無論浦鹽斯德も西伯利の東部も日本に取られてしまふから、速に講和談判をしたら宜からう。どうか露國皇帝に貴官から其旨を電報にて傳奏して呉れとカシニーに頼んだけれども一向返事を持つて來ないから、聖彼得得に駐在する亞米利加の大使

マイヤーに電報を打つて、露國皇帝に謁見して余の電報に就てどう云ふ意嚮かを聞くやうに命じた。依てマイヤーから段々聞いた所が、華盛頓駐在の露國大使のカシニーから露國皇帝が受取つた電報は余が同大使に談じたる意見とは餘程違つて居つて、余が言つた通り露國皇帝には言つて居らぬことを發見したから、そこで今度はカシニーを経由せず直ちにマイヤー大使を通じて講和談判の勸告をして見ようと思ふが、若し露西亞が宜しいと同意して來た際は日本も講和談判に同意して呉れるかどうか、君の意見はどうだ。と聞きましたから、私は、日本政府は同意すると思ふ。是まで君が日本の爲に働いて呉れたことでもあり、又旅順・奉天・波羅的艦隊の戦さの有様もあの通りであつたから、もう茲で日本も講和談判をするのが至當である。故に君に對して必ず日本政府は同意すると思ふ。さうかそれでは是から露國の方に交渉して見よう。と云ふので、終に露國皇帝に直かに

マイヤー大使から言つた所が、露國皇帝は「自分から講和談判をしよう」と云ふことは提議せぬ。『然らば他人が勸告したらば御同意なさるか。』と聞いたならば『それならばする。』と云ふ返事であつた。そこでルーズベルトが言ふには『露國は此通り、他人が發議すれば講和をすると云ふのであるから、僕が講和の勸告者にならう。』と決心し、日露兩國に勸告状を同時に出すことにした。元來此の勸告状は華盛頓に駐在して居るカシニー大使に渡して本國に送つて貰ふのが順序であるけれども、カシニーが僕の言ふ事を改竄する疑念があるから露國駐在のマイヤー大使を以て露國に勸告することにした。さうして日本に對しては此の國に居る高平公使を経なければならぬが、日露兩國に對し同様の方法を執つて東京駐在のグリスカム公使をして同時に此の勸告状を日本政府に提出せしむる積りである。之を見て呉れと言つて私に其勸告状を見せた。それを私が一讀すると實に名文であ

る。

「どうだ、まだ何か加へることがあるか。若し君に意見があつて加へることがあれば何でも望み次第書き込む。」

と言つた。

「もう是れ以上に望はない。實に事理明晰・論理整然、全く間然する所はない。

此文章は殆んど日本の爲に書いたやうに見える。」

と私は皮肉なことまでも言つた。

「それでは直ちに發送しよう。」

と言つて、それを公文に書かせて兩國に送つた。是は六月の八日である。是れ全くルーズベルトの偉い所であると私は思ふ。

此時ルーズベルトは私に向ひ、

「借愈々講和談判になるものと見て、君に忠告することがある。露西亞に對し是迄何遍講和談判の事を言ふても露西亞の領地は日本軍が占領して居らぬからと言つて拒絶した。そこで只今から二個旅團の軍隊と砲艦二隻を以て樺太を取れ二個旅團で樺太に居る露西亞兵を追拂ひ、又二隻の砲艦でぐるぐる樺太を巡航して早く彼の領土を占領せよ、講和談判にならぬ前に今の中ならば宜いから早く樺太を取れと云ふことを君から日本政府に言ふて呉れよ。」

と言ふので、六月八日に其旨を政府に通報した。歸朝後當局者より聞く所に依れば、其頃廟議は樺太を取るや否やに付て餘程議論があつて永らく決まらずに居つたが、一日俄かに廟議が決つて混成旅團一箇、砲艦二隻を樺太に出發せしめた。其時或る陸海軍の人は今まで主張したときは反對されて居つたが、どう云ふ譯で廟議が俄に斯う云ふことになつたか分らぬと言つて居つたさうです。此の砲艦二

隻と一箇の混成旅團を遣つた後、旅團が樺太に上陸した日は七月八日で丁度ルーズベルトが私に忠告してより一箇月後のことです。是はルーズベルトの忠告が日本の廟議を動かしたかどうかは知らぬけれども、大統領が私に向つて樺太を取れと云ふことを言つたのは一箇月前である。加之旅順が落ちて以來、殊に奉天の戦で勝つて以來、樺太を取らうと云ふ意見が陸軍にはあつたけれども中々極まらずに居つたのが一夜の中に掌を返へすやうに極まつて、急に樺太を取れとの軍令が下つたと聞いた。之れはルーズベルトの忠告が日本政府を動かして斯く決心するに至つたかどうかは私は知らぬが、樺太に關する事實はさう云ふことになつて居ります。

諸講話談判の開始と極つたが、誰が露西亞から全權委員として來るかと思つて居ると、伊太利駐在の大使のネルドルフが來るとか、誰が來るとか云ふ噂があつ

たが、何れも固辭して往かうとは言はぬ。最後に愈々ウイッテが來ることになつた。是より先きカシニーは亞米利加の評判が悪いから呼戻されて、ローゼンが亞米利加駐在の大使になつた。此の人は日露開戦の時最後の引揚迄東京に駐在した人である。さうして此の人がウイッテと共に全權委員となつた。此の時ルーズベルトが私を招んでウイッテが來る以上は、日本からも第一流の政治家が來なければいかぬ。ウイッテは露國第一流の政治家であるから、日本で之に對抗する人は伊藤侯である。伊藤侯に今度は御出馬なさるやうに君から電報を打てと言ひました。それで私が答へて言ふのに、

「それはいかぬ——(第一回の講演のときに申しました通り)——伊藤侯は二月四日の御前會議の時に、陛下から此の戦争中は伊藤は東京を離れず、朕が左右に在つて外交及び國務を輔佐せよと云ふ御沙汰があつたから、伊藤侯は來られな

い。僕が電報を打つても駄目である。」

と言つたのですが、其の後小村外務大臣と高平公使が全權委員になつた。

偕ルーズベルトの勸告状の終りに、兩國が勸告に應じて講和談判を開くと云ふことになれば、其の場所は自分が周旋しても宜しいから御下命相成りたいと書いてあつたから、露西亞も日本も場所の選定をルーズベルトに一任した。是は私に關する話だから餘り言ひたくはないけれども、實際の話であるから申します。偕ルーズベルトに場所を決めて呉れよと日露兩國から頼んで来たから何處にしようかと云ふ相談が私にあつた。それで私は、亞米利加の大統領が斡旋して講和談判を開くのであるから、亞米利加が一番宜いと思ふ。と斯う言つた。さうすると、それは尤ではあるけれども一應兩國の意見を聞いて見ようと言つて、露西亞の意見を聞いた所が露國政府は巴里と言ひ、日本の意見を聞いた所が日本政府は芝罘

か山海關と言ふて中々開きがある。そこでルーズベルトが私を招いて曰く、

「僕の考ではラヘーグが宜からうと思ふ。ラヘーグは萬國平和會議のあつた所であるし、ラヘーグならば露西亞も同意をすると思ふから、日本もどうかラヘーグに同意をして貰ひたいが君の意見はどうだ。」
と依て私は、

「それはいかぬ、抑々勝つた日本が態々歐羅巴まで往つて講和談判をすると思ふ例は今までないではないか。負けた國が勝つた國か又は其近方まで来るのが當然である。現に日清戦争には支那が負けたから馬關に来て講和談判をした。勝つた國が遙るく、ラヘーグ迄出掛けて談判すると云ふことは不同意である。矢張亞米利加が宜い。亞米利加ならば兩國の中程だから露西亞も出て来る。日本も出て来る、所謂相引だ。」

と答へた。さうするとルーズベルト曰く、

「併しラヘーグに定めれば彼處には僕の親友のドクター・マイヤーと云ふ公使が居る。是は僕の秘書官同様にして僕の言ふ通りに日本の爲に働けと言つてやることも出来るし、又暑中休暇の漫遊と稱して僕の腹心の者をラヘーグに遣つて日本の全権委員の秘書官同様に働けと言つてやるから是非ラヘーグにして呉れ給へ。」

と言つた。併し私は、

「それはいかぬ。能く考へて見給へ。ラヘーグと云ふ所は露國皇帝の發議に依つて萬國平和會議を開いた所であつて、露國皇帝は自分の領分のやうに思つて居る。況やラヘーグの王室は露國皇帝と親族關係である。そこに日本の全権委員が往つたら手も足も出ないから、同意することは出来ぬ。」

「それでは何處にするか。」

「矢張亞米利加が宜からう。」

と私は亞米利加を主張した。所がルーズベルトが云ふには、

「亞米利加は遠いから露西亞は承知しまい。それでは奉天と哈爾濱の間が宜からう。」

と依て私は、

「それもいかぬ、君能く考へて見給へ。哈爾濱にはリネウイチが六十萬の大軍を率ゐて嚴然と控へて居る。奉天には全勝軍の大山滿洲軍が意氣天を衝くの勢を以て滯陣して居る其の中間の場所日露の講和談判委員が會議を開き、會議が進行するに従ひ是は讓歩してはいかぬ、あれは十分主張せよと言つて、軍人が劍附鐵砲で講話談判委員に迫つたならば講和談判は丸で型なしになる。講和

談判が軍人の思ふやうに纏らなければ軍隊が承知せぬ。君も其位のこととは知つて居るだらう。」

「成程それは尤だ。併し亞米利加に極めることは僕が困る。」
と言つた。

「何故困るのか。」

「どうも世の中では僕が今度の講和談判の周旋をしたから、ルーズベルトが自己の名譽の爲に亞米利加に極めたのだと言はれるから、さう云ふ惡評を僕は受けたくない。それ故に亞米利加以外に定めた。」

「それは君にも不似合な事を言ふ。さう思ふ者があるかも知れぬが、亞米利加で開くのが當然と考へる。能く考へて見給へ、亞米利加の建國以來百三十年の間に世界に誰か名高いかと言へば、先づ建國の初めジョージ・ワシントンが出て

北米合衆國を建設し、續いてエイブリハム・リンコルンが出て奴隸解放を實行した此二人あるのみ。併しそれは米國の内政の事だ。世界に向つて亞米利加の名聲を發揚したのは、君が今度の日露戦争の調停者として初めて世界に名を擧げたのではないか。それ故に君が自分の膝元で講和談判を開くのは當り前と思ふ。のみならず僕は君と同窓の友人である。友人として斯ふ云ふ名譽の轉げて來たのを取り逃すと云ふのは甚だ残念に思ふ。他人がどう云ふ風に言はうが構はぬではないか。亞米利加に極めるが良い。」

「よし分つた。それでは亞米利加にする。」

と言つて亞米利加に決まつた。それから亞米利加と言つても何處にするか。華盛頓は暑中は非常に熱い。彼處にしやうか此處にしやうかと詮議の結果、結局ポーツマスに極めた。彼處は軍港であるから第一新聞記者の取締にも良い、第二には

兵隊が立番して居るから兩國の全權に危害を加へるやうな者を取締ることも出来る。さうして彼地は涼しい所であると云ふのでポーツマスに極めました。さうして露西亞からはウイッテ、日本からは小村外務大臣が、各々亞米利加に向つて來ると云ふことになつた。夫れまでに大統領は度々面會して講和の條件に付協議致しました。

是は餘事でございますけれども、一寸ルーズベルトは如何なる人であるかと云ふことを御列席の御方々に報告したいと思ふ。或る時官邸で食事の時にルーズベルトが云ふには、

「君とは殆んど二年許此處で交際して居るが、君はまだ本當のルーズベルトを知らぬ。」

「それはどう云ふ譯か。」

「此處は大統領の官邸である。官邸に於ける僕は北米合衆國一億二千萬の人民の主權者であるから、多少邊幅も飾らなければならぬ、體裁も整へなければならぬ。君が僕の本性を見るには此の大統領官邸に居るルーズベルトではいかん。僕のオイスター・ベアの私宅に一晚泊りに來て、僕の家で僕と一緒に飯を食ひ給へ。さうするとルーズベルトはどう云ふ人間だと云ふことが分る。是非來給へ。」

「それでは喜んで往かう。」

と云ふ約束をした。其後七月七日泊りがけにて私邸に來て呉れと云ふ電信が來ましたから私は其の日の午後紐育から汽車に乗つてオイスター・ベアに往つた。さうしたならばステーションにルーズベルトの常用の馬車が待つて居つた。それに乘つて往くとオイスター・ベアはロング・アイランドの田舎でサイド・ウォーク

(歩道)もない、補装道路もないひどい所である。さうして野原の草茫茫たる所を昇つて往くと、小山がある。是が有名なるサガモア・ヒルである。其絶頂にルーズベルトの家が垣もなければ境界もなく野原の草茫茫たる所に建つて居る。其の粗末な木造の家に馬車が着いた。茲に其家の構造を一寸申しますが先づ玄関を這入ると、中には幅一間半ばかりの廊下があつて、其の右が書齋で左が應接の間になつて居る。其の應接間の外に椽側(ベランダ)があつて其の向ふが傾斜したる芝生になつて居る。さうして其の廊下の突當りが廣いホールになつて居る。是はルーズベルトが大統領になつた後夏の間、各國の大使・公使が信任状を捧呈するときに在來の狭い應接間ではいかぬから、建増をしたもので其の左右には色々の武器や狩獵にて得たる獸類の頭や角が飾つてある。其横に小さな食堂があるのみ。其の晩の食事には男子は例に依つて燕尾服を着けました。大抵上流社界では夜分

家庭で食事をするときでも燕尾服を着るのであります。茲に列席したる人々はルーズベルト及び夫人、ルーズベルトの妹のロビンソン夫人、其他は子供等で全く家族的の晩餐であつた。大統領の御馳走であるから晩餐は定めし色々な美味が出るだらうと思つて居るに大に相違して、ソツプが出て、次に魚のフライと牛肉のロースとのみにて、後はプツチングと果物、唯それだけで、洵に質素なものである。使つて居る家僕は黒奴で、亞米利加人は使はない。是は亞米利加人は給料が高いからである。食事が済んで、珈琲は應接間で飲まうと言つて應接間に這入つた。應接間に這入ると真ん中に丸テーブルが一個あつて、其の上に石油ランプが一つある——明治三十八年の頃ですが——瓦斯も使つて居なければ電気は勿論ない。私の一番町の家では已に電氣を附けて居つたのにルーズベルトの邸宅ではまだ太古の石油ランプを用ひて居つてそれも唯一個である。其の丸テーブルを中心

にして、ルーズベルト及び夫人と私と三人が寄つて色々の四方山話をした。夫人は何をして居るかを見ると編物をして居る。大統領の奥さんが編物をして居る。

「貴女は何をなさつて居るのですか。」

と聞くと、

「是は子供達の靴下です。子供達の靴下は皆私が編みます。」

と言ふ。一國の元首の夫人「First lady of the nation」(一國の第一の夫人)と言はれる人が子供の靴下を編んで居る。此處で我々三人が色々の話をして十時頃になつた。さうすると夫人が、

「私は是から御免を蒙つて寝みます。」

と言つて窓の戸締を始めました。此の時ボーイも女中も主人に構はず先きに自分の部屋に往つて寝て居る。日本では御客様や主人の寝るまでは下女も下男も寝な

いのに、アメリカ加では自分の仕事が終われば、自分の部屋に行つて先きに寝てしまふ。夫人が再び

「私は少しお先に御免を蒙ります。」

と言つた時、ルーズベルト曰く、

「自分は少し金子男と要談をするから書齋に往く。」

と言つた所が夫人が蠟燭立二個を持つて来て大統領と私に與へた。あなた方は御承知でありませうが、二三十年前に日本の車夫部屋などにもありましたが、ブリキで製造したる蠟燭立と同一の物である。之に燐寸を添へて我々兩人に與へてテーブル上の石油ランプを消し自分も一つの蠟燭立に火を附けて、グッドナイト(左様なら)と言つて二階にある自分の寢室に往つた。それからルーズベルトと私は與へられたるブリキの蠟燭立を持つて書齋に這入つて、講話談判の事に關し

協議して一時過ぎになつた。それからルーズベルトが、君の寢室に案内しようと言つて蠟燭に火を附け先きに立つて二階に上つて、

「是が君の寢室である。」

と言つた。之を見ると内部は凡て今から五六十年前の植民地時代の有様で其片隅に高い木造の寢臺がある。又他の一方には洗面臺の上にピッチャーが置いてある。栓を捻つて水が出る近世的の物ではない。それからルーズベルトが寢臺の中に手を突き込み、

「毛布が一枚より外ない。此處は夜中にひよつとすると寒くなる、風を引くといけないから、もう一枚持つて来よう。」

と言つて出て往つた。やがて又蠟燭立を右の手に持ち、左の手に毛布を引つ抱へて、やつさくと云つて二階を上り来て、

「之を足元の方に置くから寒くなつたら掛けなさい、是で大抵用事は済んだ……あつ！ 忘れた。大事なことを忘れた。便所を教へてない。是は大事なことである。夜中に君が起きても何處にあるかを知らないと大變である。一寸案内しよう。」

と言つて、蠟燭立を手に持つて二階を下り、長い廊下を歩いて隅の方に往つて、

「此處が便所である、此内には綺麗なタオルがある、又石鹼もある。」

と云つて引出しを示し、再び寢室に戻り、

「是で何も彼も用は済んだから御寢みなさい。」

と言つて握手して室を出て行つた。それから私は寢て考へるのに、日本人六千萬人多しと雖も、一國の主権者に便所まで案内させたのは恐らく俺一人だらうと思つた（笑聲・拍手）晝は官邸に於て大統領を向ふへ廻して國事を談じ、夜は其の

私邸に於て大統領に便所の案内をさせる。實に私は幸福な日本人だと其の時に思つた（笑聲・拍手）。

翌朝の食事中にも又面白い話があつた。大統領が私に向つて云ふには、

「僕は日本の武士と云ふものを非常に尊敬して居るが、日本の武士の生活はどの位の金があつたら宜いか。」

と聞いた。そこで私は、

「日本の封建時代の武士と云ふものは國主の下にある家老から下小祿の士族まであるから、是は大變な差がある。さうして三萬石位から二人扶持と六石の藏米取の士族まであるから其身分の高下に應じて生活費の多少がある。併し普通の士族は概して第一に自分の地位に相當する大小の刀二本、鎧一領、さうして正月元日とか式日に登城して國主に拜禮する麻袴、又冠婚葬祭に列する身分相

當の服装、第二に子供の教育、女は女に相當の教育、男は男に相當の教育をする費用が要る、第三に一家一年間の食料被服の費用。此三つの課目が武士の費用である。」

と答へた所が大統領が云ふには、

「それは僕と同じである。僕は我が身分相當の暮しをする丈の費用より外は必要はない。宛も君の國の武士の生活費と能く似て居る。併し君の話に依ると、僕は日本の武士より一つの費目が多い。それはどうかと言ふと、君の言ふ身分相當の費用、子女の教育費、家族の食料被服費の三項目の外に、僕には第四項目がある。是は醫者の診察料と藥代である。日本の武士は病氣をしないか。診察料は拂はないか、藥代はどうするか。」

と反問された。

「それは御尤であるが、封建時代の醫者と云ふものも國主から世祿を貰つて居るから診察料も藥代も要らない。士族で病氣に罹つた者は醫者の所に驅込めば凡て只である。藥代も只なら診察料も只である。」

「さうか、亞米利加もさう云ふ風にしたいね。」
と云ふやうな笑ひ話を重ねました。

朝食後縁側に出て大統領と二人で夢中になつて外交談判をして居ると夫人が来て、一寸私に室内に来て呉れと言ふ。私が立つて往くと、

「貴方に一つの御願ひがある。實は自分の末子のクエンタンと云ふ當年六歳になる子供が大變馬が好きで、小馬を親爺から買つて貰つて近來頻に乗廻して居りますが、此度貴方が御出でになつたから見て貰ひたいと言つて、今朝は五時か

ら起きて廐に往つて自身で馬の立髪や尻尾を櫛で搔き馬具を磨いて、芝生を何遍も乗つて廻るけれども貴方は見向きもなさらない。朝五時から起きて、見て貰はうと思つて居るのに見て下さらないと言つて泣きますので、今お父様とお話があるから、程なく御話が濟めば見て下さると申して置きましたから若し子供が馬に乗つて参りましたなら一寸褒めてやつて下さい。」

と言つた。依て
「私は夢中になつて外交の話をして居つたから氣が付かなかつたが、今度は必ず褒めてやります。」

と云ひました。程なくクエンタンが私の前に乗馬でやつて來たから、呼び止めて「おい、お前はえらい上手だ。もう一度乗り廻して見せて呉れ。」
「ちやもう一度乗り廻らう。」

と言つて其處を幾度も乗つて見せました。其の時私は、

「私の倅も六つでお前と同年であるが、今は學習院に往つて居るから、お前のやうに馬に乗るやうに勧めやう。」

と言ふと、

「それでは私が馬に乗つて居る所の寫眞を贈らう。」

と言つて、大統領に向つて、

「パパ、今から紐育に電話を掛けて寫眞屋に直ぐ來いと言ふても宜しうございませうか。」

「よし〜。」

とお許しが出た。其の後彼が乗馬の寫眞を撮つて倅に呉れました。私の倅とクエントンとは未だ嘗て遇つたことはなかつたけれども常に端書の遣取りをして居り

ました。然るにクエントンは彼の歐洲大戦争の際、フランスの飛行隊に這入つて獨逸に進入し敵の飛行機と戦つて討死しました。其墓は今獨逸の領分にあります。さう云ふことは矢張日本の小供と能く似て居ります。

夫れから大統領の一家族と共に近傍の原野を散歩しながら色々面白い話をなした。終日静養して紐育に歸り直ぐ前夜と翌朝の談話を暗號電報にて政府に報告しました。前夜の話の一節を申し上げますが、曩きに講和談判が開けることになつた時、支那の政府はなかく、狡い。直ぐ公使に命令して大統領に會つて、

「日露兩國が我が滿洲に於て戦ひたる後、今度大統領の調停にて講和談判があるから、どうかルーズベルトの盡力にて滿洲の領土を保全して、將來侵さぬやうに、又滿洲の主權を十分將來尊敬するやうに、此際講和談判に於て保證する様にして貰ひたい。」

と支那の皇帝から依頼する由を交渉した。併し是は大統領が断然拒絶した。其の理由は支那は今日まで戦さをして居る間は何とも言はずに遠くから見居つて、さうして講和談判になれば滿洲の主權を尊重して呉れ、遼東を保全して呉れ、と勝手なことを言ふが、我輩は平和克復の爲に調停するのであつて、支那の領土の保全や主權の尊重は我が任務の範圍外であるから断りをすると云つた。

翌朝の話の中に大統領が云ふには、
「佛蘭西は露西亞の同盟國であるから、陰になり陽になつて露國の爲に働いた。之に反して英吉利は日本の同盟國ではあるけれども、超然主義を採つて少しも日本の爲に働かない。是に付て實に僕は不都合だと思ふ。併し之には理由がある。何となれば露西亞が負けて滿洲から追拂はれて大連・旅順の不凍港を失つた時には、露西亞は必らず西の方面に向つて印度を衝いたり、或は波斯に出て

波斯灣の不凍港を取らうとするから將來英吉利に大關係があることを豫想して居るからである。是は君丈には言ふけれども極く秘密にして貰いたい。」
又翌朝椽側の話の中に於て非常に必要なことがあつたから是は暗號にて日本政府に通報したが、日本人も亦記憶すべきことと思ふから其の一節を申上げたい。
大統領ルーズベルト曰く、

「諸年度の戦争は日本の大勝利、又講和談判も近々に極まるならん。依て僕は將來を達観して意見を述べたい。熟く東洋の有様を見ると、東洋に國を成して獨立の勢力のあるのは日本のみである。支那・朝鮮・波斯・暹羅其他あるけれども、是はまだ中々獨立國と云ふ譯には往かない。又獨立し得る勢力もない。そこで日本が亞細亞のモンロー主義を執つて、亞細亞の盟主となつて亞細亞の諸國を統率して各々獨立するやう盡力することが急要である。それには日本が亞細亞

モンロー主義を世界に聲明して、歐羅巴・アメリカから亞細亞の土地を取つたり、彼此れすることは斷然止めさせる方針を日本に執らせたい。さうして西は蘇士運河から東は勘察加まで日本の亞細亞モンロー主義の範圍内として、歐羅巴・アメリカ人には手を染めさせない。併し既得の權利は別として彼の香港・比律賓・廈門の如く是まで歐羅巴・アメリカが租借して居る所は認めるが、其以外の土地は一切取らせぬようにして貰ひたい。」

と途方もない重大な事を言つた。そこで私は、「君からさう云ふ議論を聴いても、實は吾々日本人は君の期待に副ひ得るや否やは分らぬが、若し君が其論を愈々決行せしめようとするならば、僕は滿腔の熱心を以て賛成をする。我が身體を粉にしても君の意見を實行するやうに日本に於て盡力しよう。僕が歸つたら日本國民に其の事を報告するがどうだ。」

「いや、それは待て呉れ給へ。僕は今は大統領である。大統領としてさう云ふ論をすればアメリカ人の中にも反對する者が多い。歐羅巴人には無論多い。故に僕が大統領をして居る間はそれを公表して呉れるな。併し僕が大統領を止めて一個のルーズベルトになつた時には自ら進んで此の意見を發表する。」

「それでは君が發表する時には一本の電報を寄越せ、僕は日本に於て是がルーズベルトの希望であると云ふことを發表しようから。」

と斯う言つたことがありましたけれども、不幸にして彼は其の時機に達せずして黄泉の客となつた。實に是は日本の爲に惜むところであります。今少しルーズベルトが生きて居つたならば、亞細亞問題も斯の如く紛糾しなかつたであらうと思ふ。

倦怠々講和談判は米國にて開始せらるゝことに極つた。七月八日に日本軍が樞

太に上陸して、彼地を占領したることは大に露國政府を驚駭せしめたるものと見え、露國皇帝はローゼン大使に電信を送り、大統領に面會して日本軍を樺太より撤去する様に盡力ありたしと申込ましめました。此の時ルーズベルト答て云ふには、其事なれば自分は已に自發的に日本人に陳述したることあり。併し講和談判の承認の時其談判中は互に休戦すべしとの條件がない故に日本は其點を利用して樺太を占領したるものなれば、今更自分より其撤兵を交渉したればとて逆も承知せざるべし。と體裁好く謝絶したり。彼の樺太占領はルーズベルトが六月八日自發的に私を通して日本政府に忠告したれば此の答はさもあるべきことなり。そこで講和談判の爲に七月二十五日に小村全權が紐育に着きました。私は途中まで出迎へましたがなかく盛な出迎であつた。私は小村の旅館たるウオールドフに於て、

「僭僕は命を承けて戦争中亞米利加で活動したが、戦さが終れば僕の任務は終つた。君が講和談判委員として來たから、亞米利加は君に引渡して僕は歸國したい。どうかさう思つて呉れ。」と告げた。

「それは待て貰ひたい、今君に歸られては困る。今度講和談判が開かれるれば吾輩は表面の舞臺で働くから、君は紐育に居つて始終ルーズベルトと往復して、ルーズベルトの意見を聞いて僕に暗號電報で知らして呉れなければ僕は十分働けない。さうして僕のことには總て君を通してルーズベルトに内報して貰ひたい。何となれば僕からは講話談判中はルーズベルトには直接に一本たりとも電報は出せないから、どうか君が紐育に居つて僕を助けて呉れなければ此談判は纏らない。故に是非紐育に居つて呉れ給へ。是は元老も閣臣も皆な其の希望

である。」

と言つたけれども、私は小村に向ひ、

「君はさう言つた所がルーズベルトがそれを承諾するか否や分らない。」

と答へた。其の時小村は其内大統領に面會して其意見を聞かうと云ひ、翌日ルーズベルトの午餐會に招かれたから其時小村から其事を大統領に言ふと、ルーズベルト曰く、

「今日まで一年半、金子男が此國に居つたから、予も日本政府に對し色々の見解を言ひ、又日本政府からも色々の事を聞くことが出来た。然るに今度貴官が來たけれども講和談判中は予と貴官とは直接に交渉は出来ないから、矢張金子男の手を通して交通することを希望する。」

と答へた。依て小村全權とルーズベルトとの意見が一致したから私は紐育に居

ることになつた。

夫れから一日小村全權と會合して、

「講和談判はどうするのか。」

と私が問ひますと小村は、

「今度は是非とも講和條約を締結して歸らなければならぬ。何となれば滿洲に於て日本の陸軍は總出である。もう是以上は兵隊がない。又兵器彈藥も殆ど使ひ盡くして居る。それでどうしても此度は講和談判をしなければならぬ。」

「それはさうであらうが、條件はどうか。」

と尋ねた。所が小村は書類を示し、

「條件は是々だけれども、樺太も償金も讓歩しても宜いが、平和克復條約文は是非成立させたいと云ふのが廟議である。」

と云つた。依て私は、

「夫れならば講和談判は朝飯前に済む。併し日清戦争の時三國干渉のあつた際軍人がやかましかつたが其の方はどうか。」

と問ひました所が小村は元老の意見、軍人の態度、政府の決議等を詳しく陳述して、

「其の方は安心し給へ。併し僕は樺太と償金は是非とも主張したい。」と云ひました。依て私は、

「それは勿論賛成するのみならず、此二件に付ては已に是迄ルーズベルトと度々協議したる結果、大統領は樺太は當然日本が占有すべきものと云つて居るけれども、償金は中々困難なりと云つて居る、併し僕も及ぶ丈盡力しよう。就てはルーズベルトも今日迄あれ程日本の爲に盡力したから斯う云ふ條件で談判をす

ると云ふことをルーズベルトに豫め言つて、其條件を見せ給へ。」

と注意しました。依て小村は之を見せた所ルーズベルトは熟讀したる後、私に手紙を送つて色々忠告したに依り、小村が削つたのもあれば又改正したのもある。

其の一例は、償金を小村が Indemnity (インデムニチー) と書いて居つたのをルーズベルトが見て私に手紙を寄越して、日本の原案の Indemnity と云ふ文字は賠償金で多少懲罰の意味を含んで居る。然るに露西亞の皇帝は金は一文も拂はないと言つて居るから此の懲罰的の "Indemnity" と云ふ文字は非常に露國の感情を害するが故に、是は直すが良い。其の直す文字は Reimbursement (レインバースメント) とするが良く、"Reimbursement" と云ふ文字は「拂戻す」と云ふ意味であつて、賠償金ではない。そのみならず先頃ウィツテが露西亞を立つて巴里に来てロスチャイルドに會つて話した時に、償金はどうするかと云ふ問題が出た。そ

れに對してウイツテは、償金即ちインデムニテイは一切拂はない。併し日本が露西亞人の捕虜に要した費用は無論出す。其他日本が使つた金の一部分位は拂つても宜いと云つたことを巴里に在る亞米利加人から密報があつたに依り、或は「拂戻し」と云ふ文字を使つたら多少金が取れはしまいか。と云ひましたから、小村と相談して「拂戻し」と云ふ文字に直ほした。小村全權が日本を出發するときにはインデムニテイと云ふ文字を使つて償金と書いてあつたけれども、是はルーズベルトの意見で「拂戻し」と云ふ文字に改めることになりました。

偕小村全權の到着後數日にして露國の全權ウツイテが紐育に到着した。其日の景況は小村の時とは雲泥の差であつた。ウツイテの乗船が紐育港に入るや露國人は勿論、新聞社は數十艘の小蒸汽を出して海上に出迎へたり、さうして新聞記者が船中に入り込むやウツイテは彼等一同を上甲板に招き、豫て船中にて用意し

たる「亞米利加人の同情に訴ふ」と云ふ印刷物を配布して露國の情態と全權の心中を米國人に訴へて其同情を乞ひ、了てシヤンバンを抜いて大に其歡心を求め、又倫敦タイムスの記者にして露西亞通のサー・マカンゼー・ワレス及び倫敦デイリー・ニエスのデロン博士の有名なる二人の記者を顧問兼通信掛として同伴して米國に乗り込みました。さうして小村の旅館より數丁離れて向側のセント・リーヂスと云ふ第一等の旅館に止宿し、盛んに新聞操縦に全力を盡しました。夫れから二三日して大統領は日露の全權をオイスター・ベイの私邸に招きて之を紹介し午餐を供したる後米國の軍艦二艘に兩國の全權を分乗せしめてポーツマスに送り出しました。

それから講和談判が始つて進行するに従ひ、日本から提出した條件を議して、其日の會議終りたる後小村は其模様を直ちに暗號電信で私に通知する。さうする

と私は私の秘書に其電報又は私の手紙を持たしてオイスターベイに遣つてルーズベルトに内報する。又其返事は大統領の秘書官が持つて私の旅館に来る。それを私が小村に暗號電報で知らせる。然るに私の名でポーツマス（ニューヨーク）の小村全權に電報を打つときには露西亞の方で直ぐ目を着けるから、紐育の内田總領事の名で電報を打つ。又小村が打つ電信は内田總領事の名宛で打つ。總領事の名前ならば官用に付露西亞の注目を惹く心配もないから、私は總領事の名の下に隠れてポーツマスに始終朝から晩まで何本も暗號電報を發送した。

借講和の談判の箇條は一條から十條迄ある。此十箇條の中一番面倒なのは拂戻金と樺太の問題である。それ故にルーズベルトは私に向つて曰く、

「第一から第二第三と一つ宛片付けなさい。若し之を一緒に議すると混がらがつて面倒だから一ヶ條づゝ容易い方から片付けて面倒なものは後廻しになさい。

假令ば其の一二を言へば浦鹽の露西亞の艦隊の制限と云ふことを日本から言ひ出して居るが、是は讓つても宜い。なぜなれば露西亞人は陸では強いが海に於ては弱いから。浦鹽に露西亞の艦隊が何艘あつても日本の艦隊には到底叶はぬから、そんなものはいざと云ふときは露西亞に讓つて宜い。又芝罘や馬尼刺に逃げ込んで居る露西亞の軍艦を引渡せと書いてあるが、損傷した軍艦を日本が取つてどうなるものか。それを修繕して役に立てやうと思へば多額の金が掛かる。そんな戦利品を持つて日本に歸るのは空名譽である。さう云ふものは露西亞に讓れ。」

と云ふ風に一つ一つに意見を述べた。勿論是は私から小村全權に通知した。中立國の大統領が斯く迄日本の全權に注意して呉た。此の位日本に同情を寄せた人は私は他にあるまいと思ふ。

借要求の條件は兩國の互譲に依つて容易く片付いたが、愈々の所になつて、講話談判の最後の拂戻金問題になつてウツイテは中々金を出さうとは言はない。ウツイテがロスチャイルドに巴里で言ふたことは全く欺瞞手段であつたのかも知れない。それから樺太問題になつても中々承諾しない。依て私はルーズベルトに面會して種々熟議した所が、同人の意見は、拂戻金は撤回するも、樺太は既に全部日本の兵隊で占領して居るから樺太全部は日本が取るべきものである。故に拂戻金は撤回して樺太全部を譲渡さしむることにして結末を着けようと言ふ計畫であつた。夫れ故に小村も随分其の方針で働いたがウツイテが中々承知しない。種々協議した末ウツイテは、到頭北緯五十度を境として北は露西亞に譲れと言ひ出した。依て小村は其事を私に通報したから、私は直ぐオイスターベイに行きルーズベルトと協議した所が、同氏曰く、

「樺太は日本軍が全部を占領して居るから其半分を露西亞に返還するなら買戻金を出すは當然だから之を要求せよ。」
 と依て私は暗號電報を打つて小村に其旨を通知した。小村は段々やつて樺太半分の Redeen 即ち買戻す金を出せと交渉した。所が又是で引つ掛かつてウツイテは頑強に拒ばんだ。そこで私は又オイスターベイに飛んで行きルーズベルトに相談した所が同人曰く、夫れならば仕方がないから、樺太半分の割譲と其買戻の金は三人の委員を設けて極めさせることとし、其の委員は露西亞が一人、日本が一人、あとは中立國から一人出して、此の三人の委員が樺太北半分の割譲と其買戻の金額を五百萬圓とするか一千萬圓とするか、其の委員に委せて結末を着けさせよう。と云つて露國政府及びウツイテに交渉したけれども露西亞が承知しないのみならず、此時ウツイテは歸國の準備に取り掛つた形勢を示し、又彼は頻りに

新聞を操縦して日本に反対せしめたるに依り談判の始まる前までは新聞記者の九割は皆親日なりしが忽ち翻へりて親露となりたるもの九割と變轉し明日は談判破裂するか、明後日は全權委員が歸るかと云ふので、ポーツマスでは「破裂々々」と云ふ評判が高く、其新聞の號外がどん／＼紐育に配布せらる。此の時ルーズベルトは破裂しては大變と思ひ、此の上は最後の手段を執つて露西亞皇帝を動かして承知させるには獨逸皇帝に依頼するの外はないと考へ、獨逸皇帝をして北樺大半分問題に關する委員を設けて之を決定せしむることを露國皇帝に勸告せよと決心した。恰も好し其時（八月二十七日午後五時）聯合通信社の社長メルビル・ストーンがオイスター・ベールに來りルーズベルトの宅に飛込んで來た。そこでルーズベルトが言ふに、愈々談判が破裂になるかも知れぬ。さうすると復た戦さが始まる。戦さが始まれば日露兩國の衰滅を來すかも知れぬから、どうしても纏め

なければならぬ。如何なる手段でも宜いから一つ纏めたい。就ては獨逸皇帝に依頼して、露西亞皇帝に勸告させる電報を打ちたい。其の電報には是非とも今度の講和條約は締結するやうに御盡力を頼む。それには北樺太の半分割譲と其買戻金高は三人の委員を設けて極めさせる。此方法で纏めて貰ひたいと云ふことを吾輩の名を以て獨逸皇帝に直電を打つて呉れよ、其の文章は金子男とお前に委せるから。二人で電報の文案を作つたなら吾輩に見せるに及ばぬ紐育から直ちに獨逸皇帝に電報を打つて呉れよ。そこでストーンは其の用件を帯びて私の旅館にやつて來て其趣を告げ、此の大任を受けた證據に持つて來たと言つて紙片を出して私に見せた。其れを見ると普通の紙を引裂いて其の端が破れて居る。其事由に付てストーンが言ふには、汽車の出る前に僅か五分間しかなかつたから大統領は寛り書けなかつた。それで傍らに有り合せの此紙片引裂き壁に押當て、立ちながら

鉛筆で書かれた。其の文面を見ると「男爵金子へ」と書いて其下に「メルビル・ストーンを君の所に遣はし、獨逸皇帝に送る電信文の起草を君とストーンに委せるから電報を打つて呉れよ」と認めてある。そこで私はストーンと協議し同人はロータス俱樂部に往つて電信文を起草し又レノックス避暑中の獨逸大使代理ブツシユ男に打電して獨逸の暗號電報を持つて直ちに紐育に歸つて呉れと言つてやつて、其晩の十二時に我々三人會合し獨逸皇帝に發電することに約束して別れた。然るに私は是だけの責任をルーズベルトに負はせて獨逸皇帝に親電を打たせるに付ては、小村が今専ら談判をして居る際であるから、其の意見も聞かなければならぬと思つて、右の事情を詳しく暗號に認めて小村に電報を打つて其意見を聞きたけれども、其の晩十二時になつても何等の返事も無い。終に午前一時も過ぎたから明朝面會しようと思つてストーンを歸宅せしめた。明朝六時頃ストーンから

小村の返事が来たかと尋ねられたけれども未だ来ないから返事の致し様がない。又催促の電報を打つた。然れども猶ほ小村からは何の返事も来ない。午後一時に小村からの電信に依れば大統領の好意は感謝すれども、今日の場合、大統領から獨逸皇帝に電信で依頼しても、露國皇帝の決心を翻すことは出来ないとある。依て其旨をストーンに通知して大統領から獨逸皇帝に發送する電信は止めました。翌二十九日小村全權から電信が来た。

「今朝の會議にて拂戻金は撤回、樺太は北緯五十度を以て分割することに決定した。尤も是は本國政府の許可を得て決定したから遺憾ながらルーズベルトの勸告には應ずることが出来ない。」

とあつた。後で聞けば小村は私が電報を以て獨逸皇帝にルーズベルトの直電を打つや否やを尋ねる前に已に本國政府に電報を打つて、到底北樺太半分は無償で遣

らなければ條約は成立せずと云ふことを言ふて政府の訓令を待つて居る際であつたから、ルーズベルトの意見に對して何とも返事が出来なかつた。愈々政府の許可を得たるに依り、小村は買戻金を撤回し樺太半分を得て彼の平和條約に調印した。それで其の電報を持つて私はオイスター・ベールに往き之をルーズベルトに見せ、北樺太半分を露西亞に遣つて平和は回復したと云ひました。ルーズベルトは曰く、

「樺太を半分遣つたのは實に遺憾である。僕は償金さへ撤回すれば樺太は日本に取るべき權利があると思つたのに甚だ残念な事であつた。」

と慨いた。ルーズベルトは樺太全部を日本に取らせる爲に講和談判の明けざる以前に二箇旅團と砲艦二隻で樺太を取れと言つた關係もあるから、是非ともあれは日本に取らせようと盡力して呉れたのである。此の關係は日本國民の是非知つ

て置くべき事だと思ひますから御話を致します。茲に一寸お話ししますが樺太半部割讓に付ては日本政府は非常な攻撃を受けたが露國に於ても亦非常な反對があつた。講話條約締結の功に依り伯爵に叙せられたるウイツテは國民の痛罵を受け Polousagalinsky (樺太半部伯爵) と愚弄されて居りました。

それからまだ色々ございませけれども餘り長くなりませますから是で終りに致しますが、茲に愈々講和談判が纏つて來た時にルーズベルトが私に手紙を寄越した。其の手紙を諸君の御耳に入れて置きたいと思ふ。

謹啓陳者今回日本の發揮せし智慮と寛宏とに就いては余は何等の賛辭を用ふるも尙ほ足らざるを覺え候其の智慮と寛宏とは日本軍人の勇武に譲らざる月桂冠と存じ候先般貴下に約束せし一枚の熊の毛皮は陛下に献上致し度候に付何卒然るべく御執奏下され度候又近日貴下に午餐を差上げ度候間其節は御光臨

下され度候

千九百〇五年八月三十日

オイスター・ペーにて

セオドール・ルーズベルト

男爵金子堅太郎殿

そこで此の手紙が来ましたから私は九月の五日に近々歸國するから告別の言葉を述べようと思つてルーズベルトの私邸に往きました。其の時大統領は疊三枚敷位ある態の皮を擴げて見せた後、それを箱入にした。それから、

「僕は一枚の寫眞を陛下に献上したいからそれを持つて往つて呉れよ。猶ほ聞く所に依れば陛下は非常に馬が御好きだと云ふことであるから、僕が馬に乗つて障碍物高飛をして居る寫眞は友人等が巧く取れて居ると云ふから、之も献上し

ようと思ふから持つて往つて呉れよ。又僕は親書を奉りたい。今度の開戦の當初から今日まで、陛下の御稜威の廣大なることに對して僕は慶賀の意を表した

いから親書を差上げたい。併しどう書いて宜しいか僕は日本皇帝に宛てる親書の書方を知らぬから教へて呉れ。」

と言ひましたから、私は

「君も獨逸皇帝や露西亞皇帝に宛て、親書を出したこともあらうから、他の君主國の元首に送る文例と同一で宜からう。故らに日本の天皇に對して違つた文章にする必要はなからう。」

と言ひますと、書齋に往つて書きまして、封蠟を附け之に印を捺して私に渡しまして、熊の皮と二枚の寫眞は跡から送り届けると云ひました。依て其の外にまだ何か陛下に言上することはないかと問ひましたら、暫らく考へて然らば一つ傳言

を君に頼みたいと云ひました。夫れを讀み上げます。

予は陛下の聰明と達觀とに對し甚大なる尊敬を有す。又陛下の左右に在る元老及閣臣が愛國忠君の精神を以て日本の國務を指導せらるゝに敬服す。陛下の臣民は日本歴史の存續する間は其の戦時と平時とに拘らず、永く陛下の御名を記憶し又之を尊崇するならん。

之を英文で書いて私に渡し、是は君が拜謁する時に口づから直奏して呉れ給へと。「宜しい」と云ひ歸朝の後私は之を翻譯して、拜謁した時に熊の皮と二枚の寫眞と親書を奉呈した後、是はルーズベルトが拜謁の時口づから執奏を願ふと申しましたからと申上げて陛下に上奏致しました。

其後九月十一日ルーズベルトが使者を態々私の旅宿に寄越して、熊の皮と普通の半身像と馬上の寫眞に手紙を添へて届けて來た。其の手紙を朗讀致します。

拜啓陳者天皇陛下へ献上致す拙者の寫眞一葉御手許迄差上申候 尙ほ天皇陛下の御一興にもと存じ拙者馬上の早取寫眞一葉相添へ申候 然るべく御取計ひ被成下度今茲に袂別の時期に際し一言微衷を開陳致し度候過去一年有半貴下との愉快なる御交際を辱うし且又貴下が日米兩國間の和親を維持することに御盡力被下候 御功績に就ては感佩の至に不堪候 加之貴下が拙者の知り置くべき重要な所見を直接に御漏らし被下候 事竝拙者が貴國政府に知らせ度とは存じながら公の機關を経由して通牒すべきことを憚り候事をも御盡力に依り貴國政府に通牒致され候事は非常な御助勢と存じ奉深謝候 末筆ながら貴下將來の御昌榮を奉祈候

千九百〇五年九月十一日

オイスター・ペーに於て

セオドール・ルーズベルト

紐育

男爵金子堅太郎殿

是が最後の手紙であります。日露戦役一切の書類・書翰・寫眞は皆な持つて居りましたが、不幸にして大正十二年九月一日の大震災の時に悉く焼きました。幸に私が陛下の命に依り奉呈した報告書文が臨時帝室偏修局にありましたから、それを拜借して復寫したるものに就き是だけのことを申し上げたのであります。大統領領ルーズベルトが斯くまで日本に對して盡したことは、日本の歴史のあらん限り吾々日本國民として忘却することは出来ぬと思ひます。今日炎暑の際幸に皆さんが長い時間私の掻摘んだ概略の話だけでも御聽き下さつたことは、誠に私に取つては光榮と存じます。(拍手起る)

閉會辭

田中學務部長

閣下御話

吾々日本國民として、是非とも承知致して居なければならぬ事柄でありまして、而も如何なる書物を繕いて見ましても、又何人の御話を伺ひましても、到底知ることの出来ない日露戦役當時の複雑した事情、當時の國難の事情を、前後三回に亘る金子子爵閣下の御懇篤なる御話に依りまして、知ることが出来たのであります。此の點は皆様と共に洵に感謝に堪へぬ次第でありまして、閣下に厚く御禮を申し上げます。

閣下の御話を伺ひまして、私共が如何に感激の情に充たされましたかは、既に第一回の御話を伺ひました際に、荒川日本大學中學校長より洵に眞摯熱烈の態度を以て御述べになりましたが、矢張私も只今覺えました所の感激の情と云ふものは荒川君の述べられました通りであります。満場の皆様も御同感のこと、信じます。(拍手)

今日御疲れのところを、更に同じ事を繰返して申上げることには、却て御迷惑と存じまするので省略致したいと思ひますが、この際同様の感激を皆様と共に持つて居りますることを閣下に申上げまして、御禮の御挨拶と致したいと思ひます。

御別れに臨みまして閣下の御許しを得まして、一言私より皆様に御披露申上げたいことがあるのであります。それは此の前後三回の御話に依りまして、十分御分りのことと思ひますが、閣下とあの偉大なる人傑ルーズベルト氏の御交情が如何に深く濃やかで在らせられたかと云ふことであります。若し當時閣下なかりせば、我が國は斯程までの同情を米國より得られなかつたに相違なからうと思ひます。ルーズベルト氏が自分の最も信任する外務大臣にも秘して居つた事柄を金子閣下に對して打明けて居る。あの獨逸皇帝の手紙の件の如き、此の一事だけでも

實に信以上のものが兩者の間に存して居つたことを知ることが出來ます。私が嘗て、

友情不帶主權威幾度迎吾 親闢扉白殿宴終人去後 三更密定媾和機

斯う云ふ洵に友情の籠つた閣下の御心情を吐露せられたる七言絶句を伺つたことがありますので、こゝに御披露申し上げます。此御二方の御友情は洵に管鮑貧時の交りも及ばぬ實に古今東西を貫いて稀に見る美談ではないかと、思ふのであります。

本年は御大典を擧げさせられる日本國としては洵に御目出たい記念すべき秋でありますから、御大典記念事業として御講演を上梓致しまして、國民精神の作興の一端に資し、以て閣下の御厚意の萬一に酬いたいと思ふのであります。斯かる暑い際に滿堂の諸君の御清聽を得ましたことは、主催者と致しまして之又厚く御

謝

辭

衆議院議員
日本大學中學校長

荒

川

五

郎

閉會々辭

禮を申し上げます。

是で閉會致します。

(拍手起る)

満場の諸君。今日は容易に聴くことの出来ない有難い御話を伺ひまして、此儘無言で歸る譯に往させぬ、會員の代表を以て感激の誠意を表し御挨拶を致すことが相當の禮儀であらうと思ひまして、主催者たる府の當局者に申しました所、其れは誠に同感であるから、直ちに私に致すやうにと云ふことでありました。突嗟の場合、辭退して時機を失しては相済みませんから、仍て甚だ僭越ではありませけれども、皆様を御代表申して茲に一言感謝の意を金子子爵閣下に申上げやうと思ひます。(拍手)

既に二十年を経る歴史の跡でありますけれども、御話は極めて新しいのであります。聴くことの出来ない新しい有益な、而かも國民教育にも最も重大な衝動を與へ、意義を與へ得る此御話を承はりましたことは、洵に御同様感謝に堪へない次第であります。承はります通りに當時日露兩國の國狀は、第一陸海軍の兵力の

上に於ても、又國家全般の經濟其他の事情の上に於ても、我が國にとつては到底勝つべき算盤は出ないのであります。唯併しながら全く勝算無しと云ふも、算盤以外に於て、そこに勝つべき素質は即ち在る。恃む所はそれである、それは何かと言ふに國民の結束力と正義の力である。我が日本が此勝つべき算盤の出ない場合に、謂はゆる刀は折れ矢は盡きて、此日本丸も太平洋に沈むかも知れない、五千裡の太平洋の上に一葉の扁舟が飄々として漂つて居るが如き危険な状態なるにも拘らず、全國を擧げて國民一致して之に當りましたる此結束力は抑々何に因るかと言へば、我が日本の國體である皇室中心、此堅き中心力がある爲に結束が出来たのである。總て何事にも一致結束の必要はありませんけれども、中心の集注力がなくては結束は出来ない。團結は出来ない。我が日本が世界に冠絶したる國體をもつて、其の皇室中心の下に舉國一致する所の此結束力なるものは、我が日本

國民の大なる光榮であり、絶大なる力の源泉である。況や戦ひは萬勝つべからざるも、勝敗を度外に措いて、平和の爲正義の爲に斃れて後ち止むと云ふ此大決心たるや、全世界の人道の上に大正義を發揚すると云ふ大覺悟で、彼の謂はゆる此黄色い小さな猿の健氣さに至つては、是亦全世界の同情を惹かざるを得ない次第であると思ふのであります。

斯様にして勝つた今日より見れば、勝つべからざる素質に非ずして、此重大なる力を持つと云ふこと、正義は最後の勝利であると云ふことを如實に證明し得たと云ふことは、我が日本國の有り難い結束の國の力、正義と云ふ世界人道上の力が茲に相俟つて、此大意義を發揚し得たので、洵に御同様天下後世に對して大名譽でありまして、將來永く日本民族の感激に堪へない正義の精神を確保する次第であります。

併し此至大至重の結果を得る其間に於て上 陛下の御宸襟を惱ませ給ふたこと
 の如きは申すも賢き御事にして、又皇后陛下に於かせられましても御軫念深く態
 々子爵の邸に行啓になつたと云ふやうなこと、即ち只今承はつたことの如きは古
 の御身を以て國難に代はらんと祈らせ給ふた御故事をも追懷して、誠に恐れ多き
 ことで、如何に舉國一致、上下擧つて全國民の誠意が注がれたかと云ふことは此
 一事でも測り得るのでありまして、皇后陛下に於かせられても斯く迄も御心盡し
 のあつたと云ふことを承はりまして、御同様國民の感激に堪へない次第で恐懼の
 至りであります。且又直接其局に當る人は誰も同じでありますすが、其中の一例
 として只今御話のあつた兒玉大將の如きは、軍服の儘で三十日も參謀本部の寢臺
 の上に寢起きをして、此死活の運命の境に立つて必死の努力せられたと云ふこと
 である。斯様な事實を釋ね來つたならば、寔に少くないことであらうと思ふので

あります。金子子爵の如きも、此場合に一死以て、五千漉一葉の扁舟に身を托し
 天外萬里の異境に日本の國の死活の運命を背負つて往かれたと云ふ其當時の御精
 神、只今御朗讀になつた。『五千の海路風雲暗く、皇國の存亡一葉の舟』の吟懷、
 其の決死の御覺悟や、覺へず涙なしには聽くを得ないのであります。斯様に上
 皇室、當局者のそれ々、竝に全國民を通ほしての結束力と、此結束力を以て大
 正義を發揚しやうと云ふ大決心、大勇氣が斯の如く成り得たと云ふ其一部始終を
 承はることが出來ましたことは、眞に私共の心を新にする次第であります。
 吾々は今日共產黨事件など、聞くも恐しい程の國體を變更しやうとするよう
 な大それた心得違ひの者が出まして、衷心寔に恐懼の極みであります。日本の臣
 民にして我が國體を忘るゝ者があつたならば、彼等は日本の國民ではないのであ
 ります。然るに是は誰の罪でありますか。彼等も教育を受けた者とすれば、教

育者も其罪の分け前をしなければならぬ。大學生・高等學生と云ふ以上は其大學生・高等學生は、中學校・小學校を経て來たものでありませう。梯子段を中途から上つた人間ではあるまいと思ひます。然らば吾々も慥かに其の責任の一部を受けなければなりません。

先に幸徳事件の生じた時には、大分世間が驚いたやうでありましたが、それよりも幾十倍の事件が此度起つても、割合に世間の感じが鈍いやうに思はれるのは如何でせうか。全體幸徳事件の際に、國民全部が擧つて斯様な原因を除くべく大努力をしなければならぬのに、其努力足らずして今日のやうな事になつたのは或は天此大事件を下して、吾々大和民族に大警戒を與へられたるものではないかと思ふ。吾々は唯之を恐懼に堪へない、恐懼に堪へないと、口先で申して居らるべき問題では斷じてないと思ふのであります。御同様衷心切々、此重大問題に直

面して、吾々が教育者として此大責任を盡さねばならぬ此際に當り、只今の御話の如き我が國體の全世界に比類ない有難い上下一致の結束力、斯様な事などを承はることは、御同様が教育に力を盡す上に於て、一段の重味を加へることゝ存じます。

當時の實際の事實を承はりては、實に吾々は血も湧き骨も疼くやうな感じが致しましたが、尙此他にも承はれば斯やうなことは澤山ありませう。然るに當時の其の局に當られた人々はもう段々故人と成られた。然るに金子子爵の如き七十有餘の御老軀を提げ、今に御健全で在らせられて、其一舉一動、突けば血の出る生きた責任の地位に立つて、身を捧げて働かれたる其事實を、閣下より直接に承はることを得まして吾々の腦裡に多大なる感奮興起の感激を御與へ下さつた此一場の御演説は、全國民・全民族の上にも實に偉大なる力を御與へ下さつたことと思

ひます。先生此御老軀を以て、滔々二時間餘に亙つて熱心に御話下さつた其の御元氣も、全く一身を捧げて米國に使せられた當時の精神の現はれと思ひまして、閣下御自身が活きた教育の眞標本活模範として、茲に滿堂の吾々教育者は、衷心の誠意を捧げて子爵に感謝申し上げます。

實に子爵の如きは今日我國の國寶で在られる。其國寶・子爵其人の口づから、斯様な意義ある大事實を承はることを得ましたことは、實に一同の大なる幸福仕合せでありまして、私共の腦裡に感ずることは、此突嗟の場合に之を説明する言葉を持ちませず、又其の時間も持ちませぬ。只衷心滿腔の誠意を捧げて、滿堂諸君と共に金子子爵の御名譽を祝福して、今日の御講話に感謝致しますと同時に斯る有益の會合を催して、吾々府下の教育者に多大の利益を御與へ下さつた田中學務部長、并に之が斡旋の勞を御取り下さつた學務當局各位に對して、併せて深甚

の謝意を表します。(拍手起る)

謝辭
閣下。先生此御老軀を以て、滔々二時間餘に亙つて熱心に御話下さつた其の御元氣も、全く一身を捧げて米國に使せられた當時の精神の現はれと思ひまして、閣下御自身が活きた教育の眞標本活模範として、茲に滿堂の吾々教育者は、衷心の誠意を捧げて子爵に感謝申し上げます。

昭和四年一月三日 田中

日露戰爭 日米外交秘錄(終)

昭和四年十月二十日印刷
昭和四年十月十五日發行



不許複製

日露戰役秘錄(奥付)

編者

東京府教育會

發行者

株式會社 博文館

右代表者
取締役社長

大橋 勇吉

印刷者

櫻井兵太郎

東京市京橋區本湊町七番地

七星社印刷所印刷

發行所

東京市日本橋區本石町
振替口座東京二四〇番

株式會社 博文館

正價金壹圓

好評嘖々たる新刊重版書！

博文館刊名著十種

| | | | |
|--------|--------------|---------------|------------------|
| 萩野由之 | 註釋日本歴史 | 六〇〇頁 | 正價三圓八十錢 送料十八錢 |
| 長沼賢海 | 參考日本歴史 | 菊判布裝 五六四頁 | 正價二圓四十錢 送料十八錢 |
| 及川儀右衛門 | 參考東洋史 | 菊判布裝 七〇〇頁 | 正價三圓 送料十八錢 |
| 中村孝也 | 英俊傳 | 四六判布裝 四二〇頁 | 正價一圓八十錢 送料十錢 |
| 福永恭助 | ほまれの十字章 | 四六判紙裝 三四〇頁 | 正價一圓六十錢 送料十錢 |
| 小松 綠 | 世界傑成功秘傳 | 四六判布裝 五六〇頁 | 正價二圓五十錢 送料十八錢 |
| 川田 功 | 砲彈を潜りて | 四六判洋裝 三一〇頁 | 正價一圓二十錢 送料六錢 |
| 賀川 豊彦 | 南風に競ふもの | 四六判洋裝 二九〇頁 | 正價一圓四十錢 送料八錢 |
| 柳井 義男 | 國際間諜戰 | 四六判洋裝 三一〇頁 | 正價一圓六十錢 送料八錢 |
| 石丸 藤太 | 米國より觀たる日米爭霸戰 | 四六判洋裝 四三〇頁 | 正價一圓八十錢 送料十錢 |



